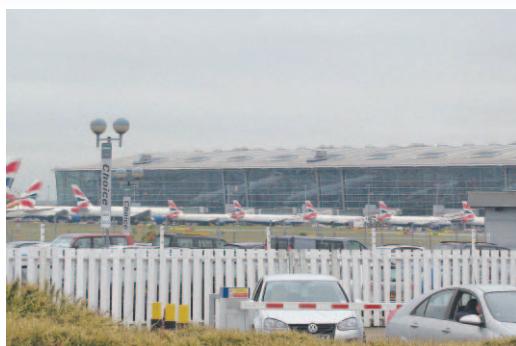


翼

空港圏の明日へ No. 2

ヨーロッパ視察 ①
町長 佐藤 晴彦



周辺自治体の市役所や町役場を訪問して国際空港との係わり合いや、各々の町づくりにどのように繋げているのかについて伺い、これから成田国際空港周辺地域や各々の市町づくりに繋げる為に企画されたもので

成田を飛び出し13時間、一旦ロンドンヒースロー空港に着き、1時間半の手続きをして別の飛行機に乗り換え更に2時間半ドイツのミュンヘン空港に到着しました。日本を正午に出発して約17時間のとても長い道のりでした。

あり、大変な成果を持つて帰られたと確信しております。



▲フライジング市長の説明

ミュンヘン空港は、ドイツ国内ではフランクフルト空港に次ぐ第2の国際空港で、4000m滑走路2本が整備された内陸空港であり、年間43万回（成田は20万回）の離発着をこなす空港で、今回のヨーロッパ視察の中核をなすものです。今回の視察は、単に空港を観察するだけでなく、空港を

の為の道路建設も必要だが空港会社や州（日本で言えば県）からの支援は無いのだそうです。また、人口や騒音被害が多い割には空港関連企業からの法人税が少なく、空港周辺地域の税金をひとつにプールして、人口に応じて配分されればと考えているそうです。

一般的に世界各国の国際空港を管理している空港会社は、JALやANAのような航空会社（エアーライジング）と空港施設利用料として着陸・離陸各々1回いくらと契約を交わし、その収益や免税店の管理などで運営をしておりますが、成田



▲ヨーロッパ視察団

空港の場合はその収益の一部を周辺地域に騒音対策事業に要する経費として交付しているので、成田空港の離発着回数の増は空港圏地域に財政的な潤いを与えるのであります。

しかしながら、成田空港での離発着回数については、事前に関係自治体との協議が必要とされており、2010年3月の暫定平行滑走路の2500m化後は、22万回が同意されているものの、更なる増便にはかなりの努力が必要であると考えております。一方ミュンヘン空港は、夜間の離発着回数についてのルールを決めたが、計画時の騒音の範囲内であれば問題がないとされており、飛行ルートを幾つかに分散させ騒音被害が集中しないよう工夫することなどにより、本来のミュンヘン空港のポテンシャルをほぼ充足させる43万回の利用を促しております。この違いのは正が私たちの今後の大きな課題であります。